

結局、春の陽気に包まれながら、僕たちは布団の中で昼を迎えた。「お腹が減ったわ」と僕を抱え起こしたメグちゃんは、僕を膝の上に乗せ、しばらく頭を撫でる。それから、コーヒーを入れるように言つて立ち上がった。

僕はメグちゃんよりも二十センチは小さいから、同じ年だと言つても大抵信じてもらえない。手を繋いで並んで歩くと姉妹だつてみんなが笑つた。

僕はメグちゃんの妹である前に、恋人でいたいからちよつと悲しいのだ。

そういう不満をメグちゃんに言つと、姉妹でも恋愛はできるのよ、と「お姉ちゃん」とか「お姉様」とか、そういう風と呼んてと言つてくる。言葉にしてべたべたと触れたら壊れてしまいそうな絶妙で繊細な関係を崩すまいとする、彼女なりの氣遣いだった。

彼女は誰の目も氣にしていなかった。僕との間のこういう少なくとも周りから見れば異常な付き合ひも好んでいた。

朝ご飯を食べながら、メグちゃんはいくつか今日の予定を告げる。うんうんと頷く僕に、メグちゃんは不満そうに口を尖らせた。

「相変わらずのねぼすけね。ちゃんと話聞いてるの？」

プチトマトがフォークに弄ばれてころころと皿の上を転がる。

「写真、撮りに行くんだよね」

「駅の近くにしましょう。街の景色を撮りたいわ」

春休みに入ってメグちゃんの部屋に来てからというもの、朝ご飯は十時、寝るのは二時か三時みたいな、そういう自堕落な生活を送っていた。今日は特に遅い。

「トーストはもういらない？」

「じゃあ、もう一枚貰っていいかな」

さくさくと、バターの湿った塩味を口に放り込んでいく。きつね色のこんがりとした面は、見ているだけで食欲をそそる。端の黒く焦げた部分が、少しだけ苦かった。

「あなた、食べる姿も可愛らしいわ。小動物みたいで」

「メグちゃんも、コーヒー飲んでるのすごくデキる大人っぽい」

「大人も何も、私たち、今年は成人になるんだからね」

そう言って、また真っ白なカップに口を付けた。こくり、と少しだけ喉が動く。飲み干したカップに、僕は代わりのコーヒーを注いだ。

「成人式、帰るんだっけ」

「帰って来いって言われるでしょうね。私はあんまり帰りたくはないんだけど」

「でも、高い振袖とか用意してもらってるんじゃないの？」

「なんにしても面倒なのよ。親戚にご挨拶とか」

それから「お見合いの誘いとか」と小さく続けた。僕は胸がきゅつ、となつて残りのトーストを皿に落とした。良い家のお嬢さんには、お見合いというものは割と一般的だ。そういう覚悟はしていたけど、彼女の口から聞くとやはりショックを受ける。

「お見合い、するの？」

「断るようにはするけれど、どれくらい続くか分からないわ」

「続くっていうのは、その、ええと……お見合いの誘いのこと？」

「ええ。地位や名誉だけを持つている人なんて、いくらでもいるから」

「あ……うん、そうだよね！ あはは……」

僕の笑い声が途切れてから、いくらかの沈黙が流れる。それから、メグちゃんは僕の不安を見透かしたようにくすつと笑った。

「大丈夫よ。私はちゃんと断り続けるから」

何も言えなくなつて、僕は半分ほどになったコーヒーに沈む金色のスプーンをくるくると回した。すっかり温くなつてしまっているのが分かる。

「ごめんね。私も、あなたがお見合いするつて言い出したら不安になっちゃうもの」

メグちゃんがテーブルに乗り出して僕を軽く撫でた。空気が動いてふわりと匂う。僕と同じ柔軟剤に、彼女自身の香りが乗ってくるだけで僕は心が躍るのだ。

「子供扱いしないでよ、もう」

「あら。私より誕生日は遅いじゃない」

「たったひと月じゃん。メグちゃんだって子供っぽいところあるし」

「ふふ、そうね。でも」

あなた、不安になると一人で泣いちゃうから、と撫でる手を止めて軽くぽん、と叩いた。そういうことを言われると、悲しくなくても、心じゃないどこか変なところから涙がやってくるような気がするのだ。

メグちゃんは僕の笑顔も泣き顔も好きだって言ってくれるけど、そう言うメグちゃんは僕に涙を見せたことがなかった。

「母はね、良い人がいるならお見合いする必要はないって表向きには言うんだけど、実際に恋人と短期同棲してるなんて言ったら、絶対に卒倒しちゃうから」

「そんなもんかなあ」

僕には分からない境遇だった。

彼女のマンションは一人で住むには広い。お嬢様として蝶よ花よと育てられたメグちゃんには確かにびったりだと思う。でもメグちゃんは「あなたの四畳半で寄り添って過ごすのも楽しそうだわ。ここは広すぎて、あなたが帰ってから寂しいの」と帰り際にいつも長いキスをする。それはえっちの前よりも、えっちした後よりも濃くて長いのだ。

彼女もお見合いの誘いが来た時、泣いたのだろうか。

そんな誘いが来たら僕はきつと泣いてしまうだろう。メグちゃんの話も聞かずに、捨てないでと縫り付いてしまうだろう。そうしてまた、メグちゃんは何も言わずに僕を撫でてくれるのだ。

きつとそうだろう。そうであってほしい。

軽く目を閉じて唇を尖らせると、それに応えてメグちゃんがちゅつと軽く音を立てた。

「あなたも振袖、似合いそうね」

「着飾るのはあんまり好きじゃないかな」

「じゃあ、和服は浴衣くらいがギリギリかしら」

「夏祭りの時も恥ずかしかったけどね」

「あら、そうだったの。部屋で写真撮ってる時は、あんなに大胆なポーズできるのに」

「あれは、メグちゃんがどうしてもって言うから……」

頼まれるだけでやってくれるのね、と僕の言い訳を笑うので、そんなのメグちゃんにだけだよ、と言っておいた。

彼女は部屋を余しているの、その一つがスタジオのようになっていた。家具が置かれていない一面真っ白な部屋で、僕はよく着せ替え人形になるのだ。指一本の自由も自分から彼女に委ねる、そういう特別な空間をメグちゃんは気に入っていた。

重ねて言うのとメグちゃんは、周囲の視線を気にするという気持ちがない。堂々としていて、確かにそれが彼女の魅力でもある。しかし往來の真ん中で、白くて明るい壁の真ん中にいるのと同じようにキスを求められると、僕の身体の方がすくんで動かなくなる。

「あなたは成人式、帰るの？」

「僕は帰らないよ。中学校、いい思い出ないから」

「うん、それがいいわ。私もね、どうにか帰らないように頑張ってみるつもり」

「そっか。ありがとね」

それから僕たちは、どちらからともなく皿をまとも始める。かちやかちやと、陶器がぶつかる音で意味もなく笑い合った。

「近くで生まれて、育っただけで、お皿をまともながら笑っちゃうくらいに気が合うなら、もっと同窓会は楽しいでしょうにね」

「気が合う人だったら、同窓会がなくても会うからなあ」

「みんな、大学自慢とかお給料の自慢とか、そういうのが好きなのよ。阿呆よ、阿呆」

蛇口から出る泡を含んだ流水が器に当たって音を立てる。残った調味料がじわりと水に浮いて流れていく。二人でその様子をひとしきり眺めていた。

「さ、そろそろ準備をしましょう」

「ね、メグちゃん。今日はどんなのを着て欲しい？」

「春めいたワンピースをテーマに……ええと、可愛い感じがいいかしら」

でも、とちよつと笑つて続けた。

「格好良い男の子の服でも良いわ。本当に恋人同士に見えるかもね？」

「メグちゃん、いじわるばかり」

恋人同士に見られたいけど、男の子と女の子が当たり前のように恋愛しているようには見られたくない。すごく我儘な矛盾を抱えた自分は、一体どんな表情をしているんだろうと思つて、それからメグちゃんにこんな表情をしているのを見られたくなくなって、僕はメグちゃんに思いつき抱きついた。

「いじわる。ほんとに」

「好きな子にいじわるしちゃう私、嫌い？」

「……うん。好き、だよ」

メグちゃんが片手でレバーを下げて水を止める。そして僕を撫でながら、小さく呟いた。静まり返った空間に、その声はしつかり耳まで届く。

「私も好きよ。好き、好き」

「メグちゃんが、好きだって言ってくれるから我慢してるんだからね」

彼女は僕の名前を交えて何度も好きと言いつづけた。腰をかがめて僕を抱え込み、耳元でずっと僕を呼び続ける。久しぶりに呼び捨てにされて、身体がビクビクとするのを止められなかった。

「そろそろ、ほんとに着替えなきゃ駄目よ」

「ん……」

メグちゃんの温かな身体から放たれて、耳元の吐息が離れていく。春特有の思いがけない空気の冷えが身体に戻ってくるのを感じながら、僕は思わず口を開いた。

「僕たち、いつまでこうしてられるのかな」

すごく嫌なことを言った。思わずに言ったにしろ、いじわる返しには過ぎている。

「あなたがこうしていたいなら、ずっとこのままでいられるわ」

でもメグちゃんは、何にも気にせず傷つかず、いつものように答えるのだ。

「私がこうしたいと思うてる間は、ずっとこうしているもの」

にこりと微笑みながらそんなことを言ってるのけるメグちゃんを、僕は直視することが許されていない気がして、熱くなった顔を横へ背けたのだった。

マンションを出たのは二時頃だった。人通りは少ない。

トンカントンカンと中から聞こえる町工場の鋼板の壁は、雨風に晒されてすっかり錆び付いている。一世代か二世代前の政治家のポスターは、僕もテレビで見たことがあるくらいだから、それが色褪せて白い肌になっていたところで何の風情も無かった。

高いところから眺めた風景は、高いところから眺めているからいいのである。生活感の溢れる風景は嫌いだった。人が多く住む密集地は離れれば離れるほど生活感が失われて純に綺麗になる。

もう誰も見向きもしない瓶入りコーラの自動販売機とか、今にも錆びて落ちそうな常備薬のトタン看板とか、僕はそういう止まった時間を更に止めるのが一番好きなのだ。

逆にメグちゃんは人間味溢れた風景が大好きで、人通りの多い街並みやポートレイトばかりを撮っている。僕が着る服は、メグちゃんが気に入った背景に乗るためにあると言っても良い。

街に出るのはあまり好きではないけれど、レンズ越しに僕を見てくれるメグちゃんの視線はいつもよりも強い気がして、僕はそれが嬉しかった。

「これ、痛いって言うらしいわね」

横を歩くメグちゃんは、淡いパンツスタイルに濃い青色のカーディガンを羽織っている。首元には長いチェーンのネックレス。水色のベレー帽は、「写真部の娘たちがこぞって着用していたから買ってみたわ」と、気に入ったらしく毎度のように被っていた。

「ベレー帽？」

水色のフェルト生地を軽く押さえて、ええ、と短く答えた。

「でもね、私はユニフォームみたいで良いと思ってるの」

チームのTシャツを着てスポーツ観戦したり、揃いの色のサイリウムを買ってアイドルを応援したりするじゃない。それと一緒に。自信満々にそう続ける。

肩に提げたカメラバッグが揺れる度に、紐がメグちゃんのカーディガンの間に食い込んだ。

「だからね、私は写真を撮ってますって言うためにこれを被ってるの」

「別に理由が無くたって、似合ってるから良いと思うよ」

「ふふっ、ありがとう。あなたも似合ってるわよ」

僕の方は、まさに女の子の子らしいピンクの花柄ワンピースを着て、黒いニーソックスで脚を覆っていた。首には首輪みたいなチョーカーが付いている。こっちはメグちゃんに着用を義務付けられていた。

街行く人に首元を見られる度に、変な風に思われていないだろうか、僕の想像力が僕自身を苛むのだ。あのワンピースの子は、横を歩く背の高い女の子に隷属しているんだろ
うとか、僕の中の通行人はそんなことばかり言ってくる。

「似合っていないよ。僕はそんなに可愛くないし」

「これだって、あなたのユニフォームよ。あなたという女の子が現実には、確かにここに
いるって主張してるの」

僕という、女の子、か。パニエが入ってふわりとした裾を押さえながら、女の子という
言葉を反芻して少し恥ずかしくなった。

「この首輪も、ね。あなたが私のものだって、みんなに示すための」

立ち止まったメグちゃんが、いつになく冷たい表情で僕のチョーカーをきゅっと引い
た。

「あ、あ……」

メグちゃんの手になされるがままに身体が動く。射抜く視線から目が放せずに、言葉が
出なくなつた。子供っぽい服装のせいで大人っぽいメグちゃんとの年齢差が更に開いたよ
うな気がして、隷属の妄想がより現実的になってしまう。

堀も高い誰もいない通りで、メグちゃんは僕にキスをした。いつもは僕に合わせて顔の高さを合わせてくれるのに、今日は僕に背伸びを強いて唾液を流し込んでくる。こういう時はメグちゃんがサディスティックになっているのだ。

「好きよ、好き」

「んああ……メグちゃん……」

普段は優しいメグちゃんが、嗜虐的な目をして僕を可愛がる。そんな中で口移しされるアメを甘く感じてしまうあたり、頭が馬鹿になっているんだと思う。

ずっと顔が離れ、二人の間に煌めく橋がかかった。

「私も、あなたのものよ」

取り出したハンカチを僕の口に当て、軽く拭き取る。ピンク色の布からは、チョコレートのような香水の匂いがした。

「お化粧、上手になったわね」

「メグちゃんが教えてくれたからだよ」

「あなたは飲み込みが良いから。良い子ね」

綺麗な瞳をしているわ、と僕を覗き込みながらウィッグの黒い前髪を撫でるのだ。

「やっぱり、ロングが似合うわね。髪、伸ばしてみない？」

「伸ばしたことないから難しいんじゃないかなあ。髪質とか」

「髪の毛のケアも教えてあげるわ」

ハンカチをポケットにしまつて歩き始めたメグちゃんについていく。ふわりとしたチョコレートの香りが普段のメグちゃんの匂いに混じつて、新しい濃厚な気配を漂わせた。

すん、と後ろから軽く鼻に息を吸い込む。

「その香水、新しく買ったの？」

「甘い香り、好きかと思つて。私の匂い嗅ぐの好きだものね」

くすくすと笑われて、顔が熱くなった。ずっと鼻を見られているような気がして、息をするのも恥ずかしくなる。

「息をするのをやめても、匂いで分かるの。こういう時のあなたの匂い、いつもと違うから。発情した匂いなのかしら？」

「は、発情？」

「私もね、あなたを嗅ぐの好きだから分かるのよ」

と言つてから、メグちゃんが僕を胸に抱いた。突然のことにかばんを落としてしまう。

「だ、駄目だつてメグちゃん。お、お化粧落ちちゃうよ……」

むにゆりと顔の形に胸が歪み、濃い匂いが嫌というほど鼻に押し込まれていく。いつまでも息は止めていられないから、短くすつと息を吸う度に、徐々に僕の身体はメグちゃんの一部みたいになつていく。

徐々に息の感覚が長くなって、僕はすっかり夢中でメグちゃんの匂いを嗅いでいた。

「キスしてる時も、ぶんぶんさせてたわね。ほんとに堪え性がないんだから」

スカートの上から、コツコツ、と人差し指で叩くのだ。プラスチックと真鍮がぶつかる異質な音と一緒に敏感なところが刺激されて、痛いくらいに倒れそうになる。

そんな僕を抱きかかえるみたいにして、僕の耳元で囁くメグちゃんは「濃い匂いさせて」とか「女の子でしょ？」と優しく叱る。

「んあ……ご、ごめんなさい……」

「別に嫌ってわけじゃないの。私の匂いが好きなら、それはそれで嬉しいわ」

でもね、と僕を解放してから言葉が続けた。僕はその場にへたり込む。気を抜いたら漏らしてしまいそうな気分だった。

「帰ってすぐとか、体調が悪い時にくんくん嗅がれちゃうと、私だって恥ずかしいのよ？」

気付いてないと思ってるかもしれないけど、と付け足した。

メグちゃんの綺麗な匂いも汚れた匂いも好きなのだ。お風呂上がりのぼかぼかとした優しい匂いも、一日動いた後の汗をかいた湿った少し強い匂いも、月に一度の匂いも、僕には快かった。

色んなメグちゃんの匂いを思い出しながらへたり込んだまま放心していたけれど、流石に道端でいつまでも落ち着いているわけにもいかない。僕はどうか立ち上がって、落としたバッグを拾い上げる。

「もう。メグちゃん、やりすぎ……」

「ふふ、ごめんなさい。あんまり発情、していたから」

「してないよっ！」

発情と言われると、どうしても顔が熱くなってしまうから、誤魔化すように大きな声を出してしまう。辺りに少し低いハスキーな声が響いた。

「濡れちゃったかしら？ 家に戻って拭いてあげましょうか？」

対照的に耳元で小さく囁く声が、僕の身体を大きく震わす。

「……っ！ ほ、ほら行くよっ！」

こういう人通りの少ない場所にいると、お互い暴走してしまう。もう一ヶ月経つ頃なのだ。仕方ない。自分にそう言い聞かせた。

それからしばらく歩いて、駅前の公園に出た。

四月になれば周辺の市からも多くの人が集まるほどの花見スポットだけれど、春休み中となれば膨らんだ蕾くらいしか観察することができない。人もまばらで、健康長寿を目指して軽やかな走りを見せる婦人か、駅からの経由地としてスーツケースを引いた若い男が通り過ぎていったくらいのものである。

この桜の木 of 全景を、どこまで行っても青い空に添えて撮影すれば実に映える写真が撮れることだろう。天に透かした木の枝は、きつとその調和と沸き立つ生命力を主張してフィルムに収まるに違いない。フィルム・カメラではないけれど。

僕たちはその公園の中心にある広場のベンチで休憩している。

座る姿勢はまだ慣れなかった。テーブルのある喫茶店くらいだと平気なんだけど、こういうベンチだとどれくらい深く座れば良いのか、どれくらいもたれば良いのか、手はどこに置こうかみたいなの、そういう自分なりの姿勢みたいなものがない。

何度かそわそわ動いていると、それが一番不自然よ、とメグちゃんに笑われてしまった。

昼下がりの公園は実に静かだったけれど、ついさっき近所の幼稚園から散歩にやって来た子供たちがわいわいと騒ぎ立てる声が響きます。

春の突風が前途有望な若い蕾の間を駆け抜け、枝が揺れてわっという歓声が上がった。

「幼稚園生の頃、小学生の頃、世界はもう少し綺麗だったわ」

感情豊かな幼稚園児を見て、昔の自分を重ねて思い出したのだろうか。メグちゃんが走り回る子供たちを遠目に眺めてぼつりと呟いた。

「ファインダーを覗いたみたいに、無意識に理想だけを引っ張りあげていた気がするの」
見えるものを見ようとしのないのよね、と幾らか前に流行った歌詞を真似て戯けてみせた。

「中学生の頃は、高校に行ったら生活が一変するんじゃないかと思ってたわ」

「メグちゃん、女子校だったっけ」

「ええ。みんなね、先輩にどう取り入るか、後輩をどう取り込むか、そんなことばかりしてた」

「お嬢様校って感じだけど、やっぱりそんなもんだよね」

県下一番のお嬢様中学校は、大抵そのまま持ち上がりでお嬢様高等学校へと進むのが通例なので、同じクラスにお嬢様が来たと自己紹介で聞いた時には驚いたものだった。

「そ、女の子は徒党を組んでニコニコしてる人が一番得をするんだから。ああいう上辺の付き合いでできた社会から離れたかったの」

メグちゃんは、だからね、と続けた。

「だからね、あの頃は同年代の男の子に憧れてたわ。変な憧れだけど」

少女漫画に出てくる喧嘩してる男の子たちが彼女のサンプルだったらいい。いかにも夢見がちな少女だったわ、と彼女ははにかみながら昔を懐かしんだ。

「高校に行ったら、たくさん男の子がいたわ。入学してすぐ、色んな男の子が誘ってきたけど、みんな私の身体ばかり見てた」

わかるのよね、そういうの、と思い出したかのようにスカートの裾を握る。

初めて見る根源から異なった人間は、彼女の目にどう映ったことだろう。

小学校高学年で同級生の女子が大人の体つきになっていく過渡を眺めている間、僕は彼女らが同じ人間ではないような錯覚を覚えた。メグちゃんも、ちよつとした事で本音をぶつけあう野蛮な男子たちを見て、そういう感覚を味わったのではないだろうか。

「誘いに乗らないノリの悪い女だって、噂されたわ」

「孤高の美女だっていうの、聞いたことあるよ」

「ええ。なんだか私が本当に気取ってるみたいで嫌だった」

僕は自分の彼女が孤高と称されるのが悪い気はしないけど、それは孤高じゃない彼女を知っているからだとも思う。

「それからあんまり誘われることはなくなったわ。しつこく誘ってくる何人かと付き合ったこともあったんだけどね、今度は『誰にでも自慢できる彼女だ』って言うの」

あの誰とも付き合わなかったメグちゃんをモノにしたぞ、あの身体が俺のものになったんだ、と勝ち誇った顔で自慢するのを何度か見たことがある。

ゲスだなあと思ってた色々言おうとしたけれど、女の子をちょっといい匂いのするトレーディングカードくらいにしか思っていない男には何を言っても無駄なのだ。

「私のこと、恭順で男性を立てる、氣立ての良いお嬢様か何かと思ってたらしいわ。みんなね、思い通りにならないから不満そうなの。何にも嬉しくない言葉で褒められて私が喜んで、でもお嬢様らしく控えめに甘えてくるんだらうって」

お嬢様中学校という肩書きは、思春期の男子の妄想のスパイスとなった。僕も僕とて、穏やかな、無知にも近い純粋を備えた、創作の中の滑稽な『お嬢様テンプレート』を心に描いていたこともある。

その像は、いかにもメグちゃんに理想の光を当てて、スクリーンに投影したような理想の幻影なのである。

「男の同士は自分の言葉をぶつけ合って、殴り合って仲良くなるのに、どうして私とはそうしてくれないのかしらね」

みんなメグちゃん自身を見ていない。壁に映った幻影を殴っても手が傷つくだけなのだ。

「恋する少女は夢見がちって言うけれど、男の子の方がよっぽど理想が高いのよ。だから、男の子は好きじゃないの。正直最初は、そのまま女子高に進めば良かったとも思ったわ」

と言ってから、メグちゃんは立ち上がる。隣で聞こえていた声が目の前に移り、上着がばさりと裾を跳ね上げた。

「でも、あの高校じゃなきゃあなたには会えなかったものね」

僕の顔を覗き込みにこりと微笑む。それから、辺りを数歩歩き回って、芝居がかったような感じで、照れ隠しをしてみせる。

「私、人間が嫌いなかもしれないわ」

たっぷりと間を置いてからそう呟く。いつもだったら「僕が人間じゃないみたいじゃん」と茶化すところだけど、強い春風を浴びながら僕は言葉が続くのを待った。

「写真部ね、辞めたの」

メグちゃんは大学で写真を撮っていた。友人と見かけた夕暮れの街の写真がよく仕上がったとか、日帰りで撮影旅行に行ったとか、そういう話を聞く度に、僕の嫉妬心が少しばかり刺激されていた。

しかし、彼女がサークルを去ったと聞くと、それもまた僕の心を痛めた。メグちゃんがその写真の才能を披露する場が減って、なんだか寂しくなる。嫉妬した時はすごく嫌な人だと自分でも思っていたけれど、僕はそれ以上に身勝手だった。

「そ、そうなんだ……写真、嫌いになったの？」

「先輩に、付き合わないかって言われたわ」

答えにならない答えだった。彼女は最初からこれを伝えたかったのだろう。

写真部は小さなサークルだったから、みんなの仲がそれなりに良かったと聞く。そういうサークルでは、ちょっとした色恋沙汰に移り変わると崩壊するのが早いから、目の前に立っている凛とした女子大生の向こうでは、一つの小さな世界が衰退期を迎えているのだろうか。

「色んな言葉で誘ってくるの。あからさまに誘ってくるわけじゃないから、フリーの女子なら流されて付き合っちゃうんでしょね。あの先輩、自信満々だったから」

なぜ辞めたのか、先輩への返事はどうしたのか、僕は頭がぐるぐるとして何も言えなくなってしまう。メグちゃんはその僕を見ながら言葉を続ける。

「女の子のこと、よく分かっているのよね。ここでこう言われるとドキドキするって、知ってるらしいわ」

「ドキドキ……？」

「そう。私もね、ちょっとだけなら気を許して良いかもって思っちゃったの」

布の上の花びらがくしゃくしゃになっていく。

「こういう話、好き？ 顔も知らない男の先輩に着いていくかもしれないって話を、私自身の口から聞くの」

だってあなた、また発情してる匂いをさせているもの、と鼻をすんすんと言わせる。

僕は少し慌てた。手先が少し冷えて、心臓はいつもより速く大きな音を立てているけれど、興奮しているわけじゃない。

「す、好きじゃないよ。好きなわけじゃないじゃん……こんなの」

「冗談よ。告白は断って、それでサークルを辞めたの。私、あなた以外に靡かないから」
彼女が予定していた口上を終えたらしく、それにね、と言いながらまた僕の隣へ腰掛けた。メグちゃんが大きな動きを取る度に、僕の前を甘い匂いが風と一緒に通り抜けていく。

「それにね、自分のカメラで写真を撮るなら、写真部にいなくてもいいの」

「でも、サークルは楽しいって……」

「そうね。最初は仲間が欲しかったし、実際みんなで写真を撮りに行くのは楽しかったわ。でも、実際覗いてみたら恋愛まみれの箱庭だったから。大学生って、そんなことばかり」

メグちゃんの友人によれば、多くの大学生は付き合ったり離れたたり、キスをしたり喧嘩したりで刺激的な毎日を送っているらしい。

「あなたは幸せ？　こういう落ち着いた雰囲気で付き合ってるの、飽きない？」

「僕たちは、普通の恋人じゃないよ」

「ふふっ。そうね」

辺りはすっかり暗くなっていた。冷たい風がスカートに入り込んで膝を震わせる。ぱちぱちと点灯し始めた街灯の白い光がベンチの左右を照らす。色んな波長を併せたLEDの光は強いけれど、無機質で冷たさを感じる。

昔通っていた商店街も、真っ黒な柱の街灯が生やされ、工業的で人間味を感じない真っ白な光を放つようになってしまった。僕は、鈴蘭灯の白熱電球の温かな光が、緑と橙のフイルターを通して出てくる様子が好きなのだ。潰れ行く商店街の止まった時間が、ずっと僕の心に留まっていた。

ベンチに間接照明のような優しく冷たい光が舞い、僕たちを包んでいく。

「ずっと言おうとしたことって、これ？」

「あら、気付いてたの？」

「うん、メグちゃんも、不安になることがあるんだなって。なんか嬉しかった」

「そっか……うん、ありがとう」

すっかり日が落ちた公園を後にした。

もう少し歩けば人通りの多いメグちゃんの好きそうな夕刻の街並みを撮れそうだったけど、騒がしい駅前のお客気は今の僕たちには合わなかったから。

次の日は雨だった。テレビでは今日は一日中雨だと言っていたし、お昼を過ぎたあたりから風が出てきて、水滴が窓に当たっては流れていく様子が見えた。久しぶりに家族サービスに勤しもうとしていたお父さんたちも、肩身狭く書斎にこもっているに違いない。

僕は止まない雨という言葉が好きだ。降り続ける雨に囲まれてると、狭い異世界に閉じ込められたような気持ちになる。こうしてずっと閉じ込められて、メグちゃんを閉じ込めて、メグちゃんと一緒に閉じこもって愛し合っていたい。

泊まりがけで海に行った時もそうだった。意図しない悪天候に見舞われたけど、一日中ホテルにいても、田舎特有の広くて古いバス待合所で待っている時も、僕は「雨、止まないわね」と隣で退屈そうにしているメグちゃんを見ながら、抜け出せない非日常に入り込んだような感覚に見舞われていたものだった。濡れた服で抱き合っていると、夕立が過ぎ去った冷たい風も気にならなくなる。

しとしとした湿った音は、その場から動くことすら気怠くさせた。

シャッタースピードを上げて水滴を空中に留めておくと、止まない雨が具現化できたような気になってすぐく高揚する。いや本当は、一つ一つの雨粒は動いていて欲しいけれど、画面の真ん中に居座った水玉レンズの向こうに吸い込まれるだけで、ずっと流れ行く無数の雨滴が僕の心を流れていく。写真を撮るといふのはそういうことなのだ。

「ね、今日は久しぶりにお家で撮影しない？」

昼下がりのくだらない旅番組の寒い空気を遮るようにして、僕はいつもより言葉少なな食卓に言葉を投げた。

「珍しいわね、あなたがそう言うなんて」

幾度となく聞いた言葉だ。その言葉を聞くだけで、息が荒くなって立っていられなくなる。椅子に座っていて良かった。

「セ……セーラー服、着たいな」

「ふーん……ま、いいわよ。どうせすることもないし」

そう言うってから、カメラを準備するために立ち上がった……ようなふりをする。僕もそれに付き従うように席を立った。

「そろそろだと思ってたのよね。なんで今日、私が黒いストッキングを履いてるのか分かるかしら？」

「急に雨が降ってきて春の割に寒いから、かなあ……あはは」

「とぼけるなら、これ、脱いじゃってもいいのよ？」

メグちゃんの視線が僕を射抜く。普段はしないような冷たい目だった。メグちゃんは僕を汚物として扱うつもりなのだ。心の底から。

「ぼ、僕が、黒いストッキングで踏まれるのが好きだから、です」

「そうよね。男の子のあなたが、脚で踏まれるのが、黒ストッキングで踏まれるのが大好きな汚らしい人間だから、わざわざこうしてあげてるの」

男が嫌いなメグちゃんは、僕の向こうに男を見出してからはもう容赦しない。メグちゃんが今まで関わってきた男への侮蔑が全て、メグちゃんの目の前でスカートを履いて彼女として存在していたはずの僕に向けられている。

いや、今のところはもう僕は彼女ではなかった。

「踏んであげましょうか？ 貞操帯、したままで」

きつと僕はメグちゃんに見下されて脚が性器と直接触れているような錯覚を起こし、必死に南京錠とプラスチックをぶつけて音を立てながら腰を振るのだろう。それを見て、メグちゃんがまた蔑んだように嘲笑するのだ。

想像すると喉がからからになって声が出なくなる。

「ほら、調教の香りよ」

メグちゃんの周りをバラの香りの霧が舞う。こうして彼女が僕を責めて被虐の快感を与える時は、必ず僕にこの香水の匂いを嗅がせる。それを身体が覚えこんでしまつて、今では何のこともないバラの香りの芳香剤にまで反応してしまう。家には置かないようにしているから生活に支障はなかったけど、僕はすっかりパブロフの犬、メグちゃんの犬になつてしまつていた。

「メ、メグちゃん……射精、したくなってきた……」

彼女は屈辱を与えれば与えるほど、僕は屈辱を受ければ受けるほど、すっかり満足してしまうのだ。歪んだ関係とは思っているけれど、メグちゃんが蔑むような視線をする度、貞操帯の中が激しく痛んでしまうからどうしようもなかった。

「ふふっ。いつもより早いわね。駄目よ、あなたが撮影したいって言ったんだから」

「撮影、集中できないよ……」

気付いておくべきだった。ここ数週間、僕はメグちゃんの手料理ばかりを食べていた。メグちゃんの腕は確かだけど、必ずしも普通の料理を作るとも限らない。きっと僕の性欲を増進するような仕掛けを施していたのだろう。

一向に荒い息が収まらない僕を見て、メグちゃんはくすつと笑った。

「そっか。もう、ひと月になるのね」

コツ、コツと、確かに僕の貞操が無理矢理でも守られていることを僕に魅せつけるように、人差し指でプラスチックの筒を弾く。その衝撃がまるで脳みそまで響いているかのよう錯覚した。ぐらぐらと、足元がおぼつかなくなった。

「う、うん……だから、外して、お願い……」

「駄目ね、男の子っぽくなってきたわよ」

貞操帯に甘い刺激を与えられ、僕は自然と腰の力が抜けて四つん這いになってしまう。

「でも、でも……」

「私を見る目が男っぽいつて言ってるの！」

目の前が白黒とした。背中にテーブルの柱が当たって、僕が蹴られたのだと分かる。

あの、ストッキングを履いた、淫らな脚で、僕が蹴られている。起き上がることも忘れて恍惚とした。

床に倒れたままの僕を見て、メグちゃんは吐き捨てるように言葉を続ける。

「そうやって、周りの男と同じように嫌らしい目で見てる彼女なら、いらないの」

「ご、ごめ……ごめんなさい……」

「ねえ、どうしてそんなに悪い子なの？ 言ってみて」

僕は起き上がって、両手の指でスカートを摘み上げる。手の震えが止まらない。

「こ……ここに、汚い精液が、たくさん、たくさん詰まっているから、です……」

「じゃあその毒、たっぷり抜いてあげないとね」

そう言って首から引き出したネックレスには、金色の小さな鍵がぶら下がっている。

この何でもないような金属片が、僕を閉じ込めて痛いほどの快感を与えていると考えただけで、屈辱から来る甘い快感がまた僕を襲う。

「さ、私の部屋に行きましょう。服を脱いで四つん這いになるのよ」

私の彼氏は奇特なのだ。

高校で同じクラスになってから気になっていた。話していて楽しい男子は初めてだった。彼は他の女子とも仲が良かった。彼は中性的で小柄な容姿からか、お互いに恋愛を意識させない、そういう付き合いが得意だった。

でも、きつと彼だって他の男子と同じに違いない。今だって実は複数の女子を狙おうとしているのではないのか。みんなのために、彼の本性を暴かなくてはいけない。

私に妙な正義感が芽生えた。本当は、彼がそういう型にはまった男性だと確認して安心したかっただけなのに。自分勝手な欲望を正当化していた。

そういう屈折した嫌らしい気持ちで、私は彼に近づいたのだ。男子が嫌いだったから、弄ぼうが何をしようが構わないと思っていた。どうせ私という人間など見ていないのだ、そういう諦観である。

私の期待に反して、彼は私を一人の人間として扱ってくれた。幸せな気分になる対等なデートを教えてくれた。隣に安心して座っていられる場所を作ってくれた。

クラスメートのみんなは、彼は優しいからきつと良い恋人になるだろうとべた褒めした。みんなの理想の彼氏だったはずなのに、私は不満だった。屈折した嫌らしい思いが再び湧き出たのだ。彼も男である限りは、いつしか私に肉欲のままに襲いかかってくるだろう、と色々男性の本能を弄ぶような誘惑をした。男子がどこを見ていて、どういう仕草に気

を惹かれるかは知っていたから。

今思い返すと、ここでやめておく、あるいは振られておけば良かったのかもしれない。

彼は「高校生のうちはそういうことはしたくないな」と言うばかりだったから、とうとう私は彼に貞操帯を装着させた。私とする気がないなら自慰もしないでほしいとか、理由は適当だった気がする。私は意地になっていた。

一ヶ月も経つと彼は、私と触れ合う度に苦しい表情をするようになった。それから少しして、彼は私に強く抱きついてきたと思うと、鍵を外して欲しい、手で触って欲しいと懇願してきたのだ。

どこか満足を覚えた。やっぱりあなたも性欲に支配されてて、私を性欲処理の道具にしか見ていないんだって冷たく言い放つと、彼は悲しそうな顔をして謝った。このまま別れてしまおうと思ったけれど、私も何故だか悲しくなった。

私の心はもう彼なしではいられなくなっていたのだ。

貞操帯の鍵は私の家にあつたから、そのまま自分の部屋に連れ込んでベッドに縛り付けた。襲われたら怖いからって言うのと、彼は黙って私の責めを受け入れた。彼に今までの男子を重ねて罵りながら扱くと、彼は息も絶え絶えにごめんなさい、ごめんなさいと繰り返しながらいくらかでも精液を吐き出した。

それから私は、何度も貞操帯を装着させて彼を弄んだ。性欲を蓄積させては爆発させ、

その様子を見て、好きな男性がいかに性欲に支配されているかを確認しては安心に近い満足感を味わっていた。そういう屈折した嫌らしい気持ちには病的と言っても良かっただろう。しかしその目的は、いつしか彼を手の平の上で弄ぶことへの快感に変わっていった。彼も初めこそ心も身体も傷ついていったようだったが、罵られて弄ばれながら大量の精液を吐き出す快感にどんどん屈服していった。

それから私は、彼に私の前では可愛らしい女の子になるように命じた。既に貞操帯を通じて主従関係ができていたから、命令してからは早いものだった。もともと彼は似合いそうな雰囲気だったから、私が服飾やメイクを色々教えこむとどんどん可愛くなっていた。いくら可愛らしくなっても精液は溜まるらしく、ほぼひと月に一回は貞操帯の鍵を外して射精させて欲しいとねだってくる。男の子のアノ日、とでも言うべきか。

だから私の彼氏は、奇特な彼女なのだ。

「あー……気持ち良いよお、メグちゃんっ」

下着姿の私の下で、全裸で黒い張型を好きなように埋められて嬌声を上げながら腰を振る様子を、彼女と呼ばずになんと呼ぶだろうか。

「勝手に、腰を振らないでっ！」

手を振り下ろすと、パシンッと乾いた音がして彼の動きが止まる。処理の時に私のペースを崩されるのは嫌だった。私は前後の動きを止めて、ゆっくりと八の字を描く。

「んああんっ！　じ、焦らさないでえ……」

「誰に口を利いているの、ねえ？」

何度か彼の臀部を音を立てて叩くと、怯えからか興奮からか全身を震わせた。

「焦らさないで、くださいい、メグちゃん……んっはああっ！」

腰を沈めると、肺を下から押されたような声が漏れる。

「ちゃんと言わなきゃ、搾ってあげないわよ？」

「メ、メグちゃん……んあっ！　めちゃくちゃに……っ、して、ください……っ！」

「……メグ様」

「メグ、さまあ……」

「はあ……しようがないわねえ」

必死に恥ずかしい台詞を吐く目の前の男を見ると、心の底から笑いがこみ上げてくるけれど、顔に出ないように出来るだけ我慢する。それでも彼にはそれが伝わっているらしく、嘲笑を受けたかのようにビクビクと性器を震わせた。

彼が勝手に快感を得ているのに腹が立つ。私の感情を見透かされたような気がするのもイライラを誘うので、私はまた平手で彼の敏感なところを引っ叩いた。それがまた彼の快感と私のイライラを誘ってしまうので、何度も何度も叩いてしまうのだ。

彼の尻が真っ赤になったあたりで、私は思い切り腰を振り始めた。彼がしてほしいと懇

願しているのだから容赦はしない。

始めは程よい快感を貪っていたような彼も、徐々に顔を歪めて大きな声を出し始める。

「ああああああっ！　だめだめだめだめえ……！　も、もっとゆっくり、んあっ！」

「自分が激しくしてって、言ったんじゃない」

「こんなに……っあ、早くなんて、言ってない、ですう……」

「無理やりされる方が良いんでしょ。ほらっ、ほらっ！」

こうやって、彼の心も身体もねじ伏せているような感覚が大好きなのだ。彼が彼女でいるうちはずっと対等でいられるけれど、男性らしい彼は虐め抜いて屈服させたかったし、男の性を管理して屈服させるのは快感だった。

「で、出ちやうから！　そんなにしたら、出ちやう、から……あああっ！」

「ありったけ出せばいいじゃないの。出したいんでしょ？」

彼の言葉に構わず深く素早いストロークで彼を掘ると、あっけなく射精してしまう。射精というよりは、ドロドロと絶え間なく精液を垂れ流すみつともないお漏らしである。

「汚いわねえ。人の家の床を汚しちゃって」

最後にもう一度彼の尻を叩くと、白くて綺麗な汚い毒がとろりと垂れていった。

「一ヶ月も我慢してからおねだりしてるんだもの、まだ毒を隠し持っているでしょう？」

「あ……あ……」

言葉を失う姿を見てぞくり、としてしまう。身体を転がして仰向けにさせると、彼の性器は刺激を与えられないままの射精に騙されて隆起したままである。

「ほら、それが小さくなるまでは、手錠外してあげないからね」

性器を刺激しない射精は、何度繰り返しても彼の昂ぶりを抑えることはできない。私の責めが止むまでは彼の勃起は収まらないのだ。彼の快感も苦痛も、私の手の中にあった。彼はそれを分かっている、止まぬ快楽への期待に震えている。

再び私から生えた棒をあてがうと、彼は快感を味わうように目を瞑った。

「ちゃんと目を見て。あなたを犯してくれる、ご主人様よ」

「ご、ごしゅじんさまあ……」

彼は射精する度にどんどん可愛くなっていく。どんどん女の子に近づいていく。可愛い姿を見る度に私の腰は早くなり、彼は私の下で何度も何度も嬌声を上げた。

何度か射精した彼とキスを交わすと、彼の興奮はまたむくむくと大きくなる。私は可愛い可愛いと囁きながら、彼が大量の白濁を吐き出すのを眺めていた。

段々と彼は出入りする張型に反応を示さなくなり、とうとう達した時にびくびくと震えて少し呻くくらいになってしまった。ここまで来ると、彼が溜め込んだ精液はほとんどなくなっている。

「汚いの、出なくなったわね。すっきりした？」

「し、しまひた……」

仰向けで正常位のようになった彼の腹部には、ぬるぬるとした白い体液が大量に放たれて、異様な匂いを放っている。これが、私と彼の月一回の儀式であった。

彼に覆いかぶさるようにして抱きつくとき、乾きかけた精液と出されたばかりのそれが一緒になってぐちゃりと潰れる。あまり好きな感覚ではなかったけれど、彼が愛おしくなっているのもそうしてしまう。

私は敏感な身体をいたわるように、ゆっくりと彼の頭を何度も撫ぜた。

「今月も、私の彼女としてよろしくね」

「は、はひ……よろひくお願いしましゅ、メグしゃん……」

限界まで搾り取られた後は、大抵その場で気絶するように眠ってしまうから、メグちゃんが介抱してベッドまで運んでくれる。

その時にはもう貞操帯には鍵が掛けられ、金色の鍵は私には見えないようにメグちゃんの胸元へと収められているから、私はまたメグちゃんの彼女になったのだと身を以って知ることになるのだ。

「ふぁ……おはよ、メグちゃん」

「ええ、おはよう。今日も可愛いわ」

目が覚めたら敬語はやめるっていう決まりだった。私はパジャマを着たメグちゃんを抱きしめて、耳元でこう言ってる。

「メグちゃん。私ね、メグちゃんが好き」

「あら、そうだったの。私も好き。大好きよ」

こうして私はまた、メグちゃんの彼女として過ごしていく。

昨日の雨が嘘みたいに、今日の世界は晴れやかだ。ずっと、ずっと、永遠にこんな毎日が続いていけばいい。

おわり

あとがき

時折、マゾヒストの精神はどこから来るのかということを考えたくなる。

世の中にはたくさんマゾヒストがいるけれど、私の場合は単に女性という存在に圧倒されたいと思っているらしい。理屈はどうでもいい。設定を言葉通りに脳内に展開して独り相撲を取って派手に負ける、そういう馬鹿正直で惨めな遊びが好きなのだ。「女子が男子に性的なお仕置きを行う学校」なら私は無力感を感じながら甘んじてお仕置きを受けるし、「全ての男を魅了する魅力を持つ脚」ならば大量の金品を貢いででもその脚に触れようとするだろう。

そういう遊びをする時に、現実の感覚は邪魔になる。法律、常識、時間。そういう概念はブランクにしておいて、必要な時に埋めればよろしい。

私の中の若年女王様は歳を取らない。学校に通っているにも関わらず毎日のように調教を重ね、多数寄ってくるマゾヒストたちの一人である私を全て見透かして、全ての財を捧げるように仕向けるのだ。彼女が女子大生になってSM風俗でバイトを始めることも、人妻になって隣人の独身男性を責めるのも、私の表明なしにはあり得ない。

オナクラのサディスト嬢は歳を取るのだろうか。彼女はいつまでマゾヒストたちを蔑んで日銭を稼いでいくのだろうか。きっと私が許可しないまま、オナクラを引退し、人妻に

なり、熟女になり、老婆になって昔を懐かしむのだろう。

かのA V女優は死ぬまで処女で居続けるのだろうか。処女喪失の回数よりも皺の数が増えても、彼女はカメラに向かって媚び続けていられるのだろうか。やはり彼女も、勝手に歳を取って人間らしい生活を獲得していくのだろう。

永遠がない世界で、私は永遠の隷属を誓うことができない。

だから私は、テキスト・データに潜り込んでいく。そこでは永遠だって自由に定義できる。私は派手な敗北を喫せるように舞台を整えて独りよがりな負け戦に望むのだ。

イメージやオーディオも悪くはないが、それらがテキスト化できるならテキスト・データに耽溺していくことだろう。おそらく私がイメージやオーディオに感じる興奮は、そのエッセンスをテキスト・データに抽出しても変わらないものだから。

少ない情報は自由にくれる。最近マゾヒスト向けのA D Vゲームを購入したが、おそらく興奮の最高潮はプレイ前の今この時なのだ。

片桐 天音

- ◆ 書名 …… 静かな街で
- ◆ 発行者 …… 片桐 天音（かたぎり あまね）
- ◆ 発行 …… 変態美少女ふいろそふい。
- ◆ 発行日 …… 2015/12/30(C89)
- ◆ 印刷者 …… 株式会社明光社 STARBOOKS
- ◆ 連絡先 …… circlemaster@hentaigirls.net

表紙イラストを含むすべての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

変態美少女
ふいろそふい。